「日々の理科」（第 2176 号）　2020,-6,24

「庭先の花（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員
田中　千尋　Chihiro Tanaka

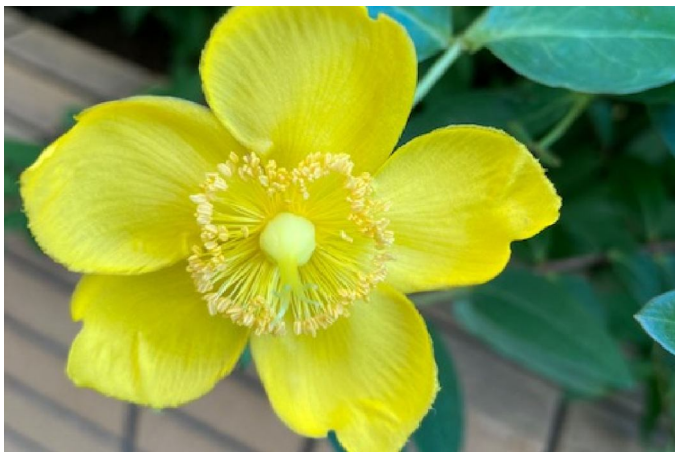
どの学年でも、小学生の子どもたちと自然観察をしていると、「先生、この花何ていうなまえですか？」と聞いてくる。１年生や２年生だと「せんせい、このおはなって、なぁに？」となる。

私が勤務する小学校は、広い大学構内にあって、理科の２時間授業の間にも十分に「自然探検」ができる。（この１学期は難しいだろうが・・・）大学構内の野草は、種類も限られているので、子どもが探し当てる種類なら、ほぼその場で同定（和名の決定）ができる自信がある。

時にはこんな「奇妙な物体」を持ち込んでくる子どももいる。この赤い物体は実はキノコの一種で「カンゾウタケ」という。肝臓に似ているからその名がついた。子どもは、植物でも虫でも鉱物でも、その名称を知ると安心し、対象に愛着が湧くものである。

「対象の名称を知りたい」という心理は、大人になっても同じだと思う。この季節、自宅の近くを歩いていると、知らない人の庭先にたくさん花が咲いている。近所の知人に花の写真を撮るのが好きな人がいて、時々作品を送ってくれる。私はわかる限り名称を書いて返信している。しかし、この同定がなかなか難しい。特に花好きの人が住んでいるような庭先の花は、園芸品種が多く、日本の山野草の知識では即座に同定はできない。

たとえばこの花だ。花の色はヤマブキに似ているが、ヤマブキの花とはちがう。しかし園芸品種だとしても、必ずどこなの分類群に属し、それに似た在来種は必ずある。花びらの形状や雄しべの付き方から、私は「オトギリソウ科」の植物ではないかと思った。これは「直感」に近い感覚で、脳内の「天然知能」がそう判断したのだ。



めしべ（柱頭）が異常に大きく丸い。また雄しべがおよそ 100 本はあろうか、先端の葯が白っぽいのも特徴だ。離弁花である。カラー版の植物図鑑で調べたところ、「タイリンキンシバイ」（大輪金絲梅）らしいとわかった。たくさんの雄しべを「金絲」に見立てているのだ。漢字を併記しているので、美しい和名だとわかる。やはりオトギリソウ科の植物だった。